りびんぐらいぶず　令和3（2021）年8月第1号

宗制の課題を超えて

◆ご讃題

◆たとひわれ仏を得たらんに、十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟して、わが名を称せずは、正覚を取らじ(第十七願)。

◆たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、至心信楽してわが国に生ぜんと欲ひて、乃至十念せん。もし生ぜずは、正覚を取らじ(第十八願)。

(Ref『仏説無量寿経　巻上』註釈版聖典 p18)

◆はじめに

「浄土眞宗○○寺派宗制」を拝見する機会に恵まれて一年余りになる。その特徴は、硬性憲法にも似て、殆ど改正不可能に規定されていることである。

◆その内容

第三章　教義

浄土真宗の教義の大綱は『顕浄土眞実教行証文類』に顕示された本願力による往相・還相の二種の回向と、その往相の因果である教・行・信・証の四法である。

教とは『仏説無量寿経』、行とは南無阿弥陀佛（これは、名号大行論に基づく）、信とは無疑の信心、証とは滅度である。真実の教である『仏説無量寿経』に説き示された南無阿弥陀佛の名号を疑いなく聞く信心によって、現生には正定聚に住し、当来には阿弥陀如来のさとりそのものの世界であるお浄土に往生して滅度の仏果を証する。

信心は、阿弥陀如来の大智大悲の徳を具えた名号を戴くことが、往生の正因となる。信心決定の上は、報恩感謝の思いから、仏徳を讃嘆する称名念佛を相続する。これを信心正因、称名報恩という。

教・行・信・証の四法は、衆生が浄土に往生する相であるから、これを往相という。

浄土に往生して仏果を得れば、おのずから大悲を起こし、生死の世界に還り来って自在に衆生を済度するのであり、これを還相という。往相も還相も、ともに本願力回向の利益である。これが自力心を否定した他力の救いであり、すべての衆生が、無上涅槃を証ることのできる誓願一仏乗の大道である。

第六章　補則

本宗制の変更は、あらかじめ○○寮の同意を経て、宗会議員の定数の四分の三以上が出席した宗会において、出席議員の四分の三以上の多数で議決しなければならない。

(以下、略)

◆宗制の課題について考える

◆一、宗制は、昭和二十一年九月十一日に発布され、翌年四月一日に施行された。

第六章に規定されたとおり硬性憲法の如く殆ど変更不可能に規定されている。

浄土真宗のキャッチフレーズ「信因称報説」は、親鸞聖人の教学ではなく、法と機の混同の上にもたらされた覚如上人の教学であると云われてきた。

それなのに、殆ど見直し不可能な程に固定化されたことになる。

果たしてそれでよかったのか。宗制そのものの改正は宗会議員の有為の先生方のご尽力に待たねばならない。

◆二、行については、所行学派の南無阿弥陀佛だけが規定され、『顕浄土眞実教行証文類』行巻に規定された「大行釈」（＝大行とはすなはち無碍光如来の名を称するなり）については全く触れられていない。これは大きな問題である。

◆浄土真宗は、聞の宗教と云われるのに、「聞」については、全く触れられていない。「聞即信」と云われる程に重要なのに、信との相違点・働きの補完構造は教学の上でも明らかにされているとはいえない。

◆「信心正因、称名報恩」として規定される「称名念佛」は、信心決定後の報恩感謝の相続面でしか規定されていない。

これでは本願力回向の信心はどのようにして獲得するのかの構造が全く示されていないことになる。

◆他力の救いを説くのに敢えて「自力心を否定した」という限定が加えられている。浄土真宗の信心はどのようにして頂戴することができるか」という伝道課題「どのようにすれば」は、ともすれば自力のはからいとみられてきた。

それ故「自力心の否定」を用いてよいか否かは「自助努力の否定」と混同して用いられて来たという反省の上に立って見直されねばならない。親鸞聖人の教学は、次に述べるように「廃立」ではないからである。

◆親鸞聖人の教学は、「廃立（はいりゅう）」ではなく「**隠顕**（おんけん）」であるのに、その視点に全く触れられていない。

第二十願は、願文の中に「聞名」が明示されていることを考えれば、「隠顕」は、今日的見地に立てば、海外開教上、異民族異教徒に伝道する上で極めて重要な視点になるのに、その視点が欠落したままである。

時代の変遷で伝道が極めて重要視される今日、いかにして本願招喚の勅命を実践的に伝え得るかが重要視されるからである。

特に異教徒異民族に対する上では「プラクティス(実践)が重要となる。第十八願では、

念佛は、願文に「乃至十念」と誓われている以上は、実践面の重要性が存することが窺われる。因みにサンスクリットの Anusmareyus（「随念（ずいねん）」）は、諸仏に付き従って称える意味内容が存することが知られ、他力の念仏者に付いてプラクティスを重ねるうちに終に成就文の「一念」に到達する道行きが存することが見落とされている。

大行釈の主語の本質は如来様であることを思えば、回向された大行は、聞名せしめる契機以外の何ものでもないのだから**称名から聞名三昧に恵まれるプロセスを見落としてはならないと見られるからである。**

プロセスアプローチ、プラクティス等の今日的視点が見落とされ、海外異教徒異民族との接点となる構造が欠落している。

リスクマネジメント、戦略的方向性の欠落等、マネジメントシステム上の重要視点の欠落は、宗門が世の中の進展から遅れを取っている姿以外の何ものでもない。

これらはただただ残念な組織の時代遅れ的姿勢以外の何ものでもない。

称名報恩のみで称名を捉えるのでは足りず、お聴聞の積み重ね、称名を通して聞名三昧に恵まれる実践面を取り入れ、新たな伝道教学を開発し伝道現場に生かしていくことこそ重要ではなかったであろうか。　　合掌。

◆正覚寺仏壮お聴聞の会　　八月八日(日)二十時より
◆正覚寺歓喜会（かんぎえ）　八月二十一日(土)午前十時より
◆その成果を公開したHPは、「正覚寺　北小松」で検索し、ヒットする「FC2」からお入り戴けます。

著作編集兼発行元（本願寺派 正覚寺内）〒520-0501 大津市北小松四五二番地
TEL077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥